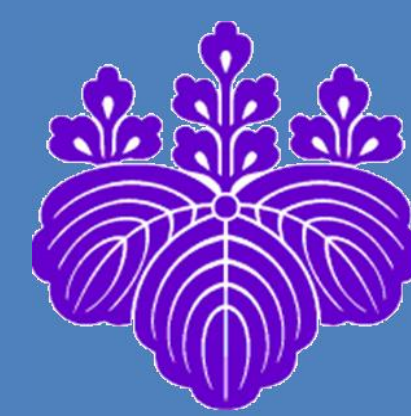


脳性まひ児の視覚認知機能の経年変化による検討



－フロスティック視知覚発達検査による3年間の分析から－

○岡本 義治¹⁾

佐藤 孝二²⁾

安藤 隆男³⁾

1) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

2) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

3) 筑波大学人間系

研究の概要

本研究は、痙直型脳性まひの視覚認知機能に困難のある小学部低学年の児童2名と高学年児童2名を対象として、フロスティック視知覚発達検査（Developmental Test of Visual Perception：以下、DTVPとする）を3年間実施した経年変化を検討し、手だてを考察することを目的とした。痙直型脳性まひの視覚認知機能の長期間の経過やその手だては検討されてこなかった。そこで対象児らにDTVPを3年間実施し経年変化を分析した結果、今までの研究と異なり、小学部低学年・高学年の児童らの下位検査項目の図形と素地は、評価点の向上があまり見られなかった。これは、視覚認知機能の改善は全て短期間で効果が表れるとは限らないことが考えられた。このことから、視覚認知機能の困難に対する学習面の手だては、図形の素地の項目である注視を考慮して行うことが必要であると考えられた。

方法

1) 対象児童

○ 準ずる学習を行っている痙直型脳性まひ、児童4名（A,B,C,D）

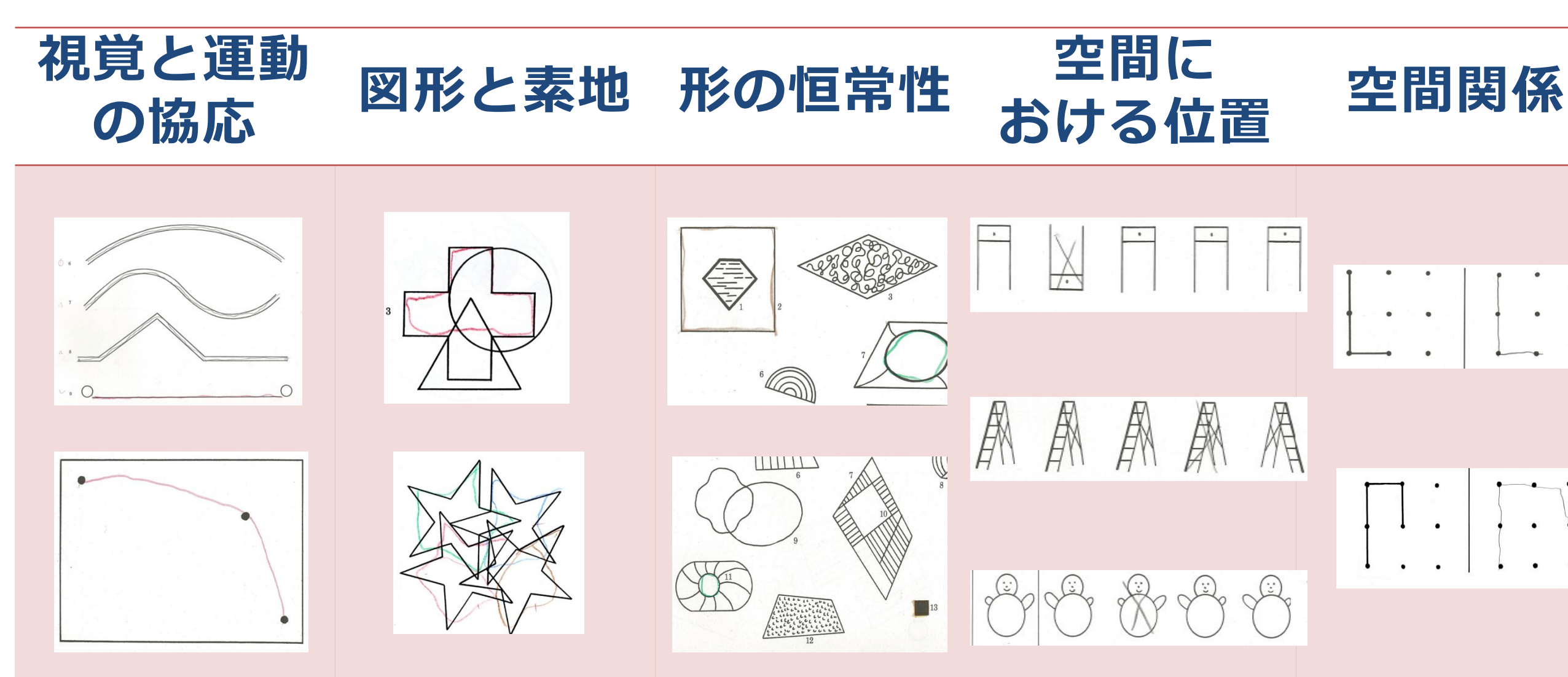
	小低		小高	
	A	B	C	D
年齢	6歳		8歳	9歳
条件	・ 視機能検査で視力的に問題はない ・ 生活上大きな支障となる視覚障害を有していない ・ 姿勢保持、上肢操作がDTVPに大きな問題が生じない ・ 教員が、学習面に「見えにくさ」があると指摘			

2) 期間

	A	b	C	D
1年	2010.5 (6.7才)	2010.5 (6.4才)	2010.4 (8.8才)	2010.4 (9.5才)
2年	2011.3 (7.5才)	2011.3 (7.2才)	-	2011.4 (10.5才)
3年	2012.1 (8.3才)	2012.1 (8.0才)	2012.2 4(10.6才)	2012.3 (11.4才)

3) 方法

○ DTVPの下位項目

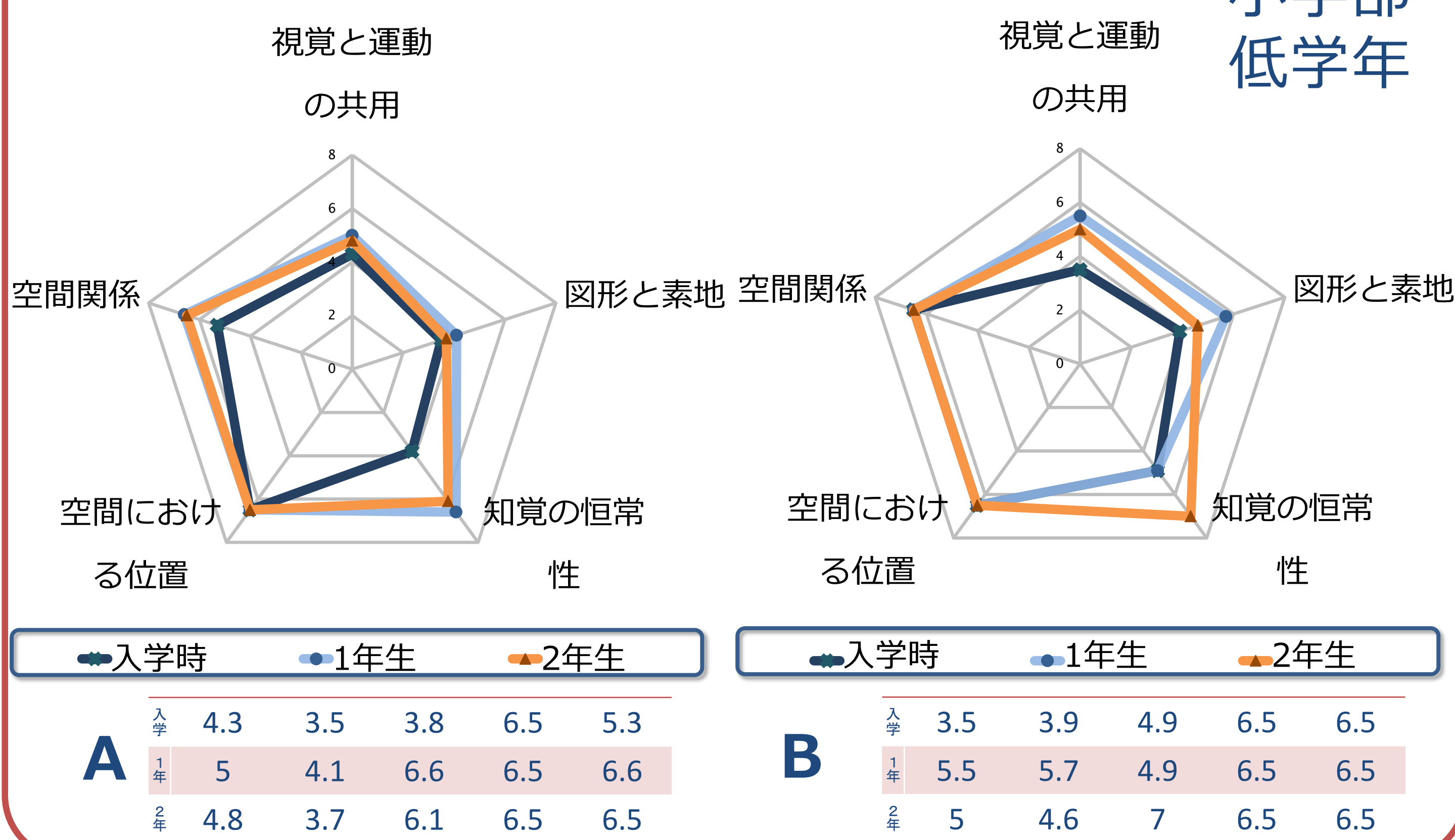


○ 自立活動の時間（40分）の指導内容

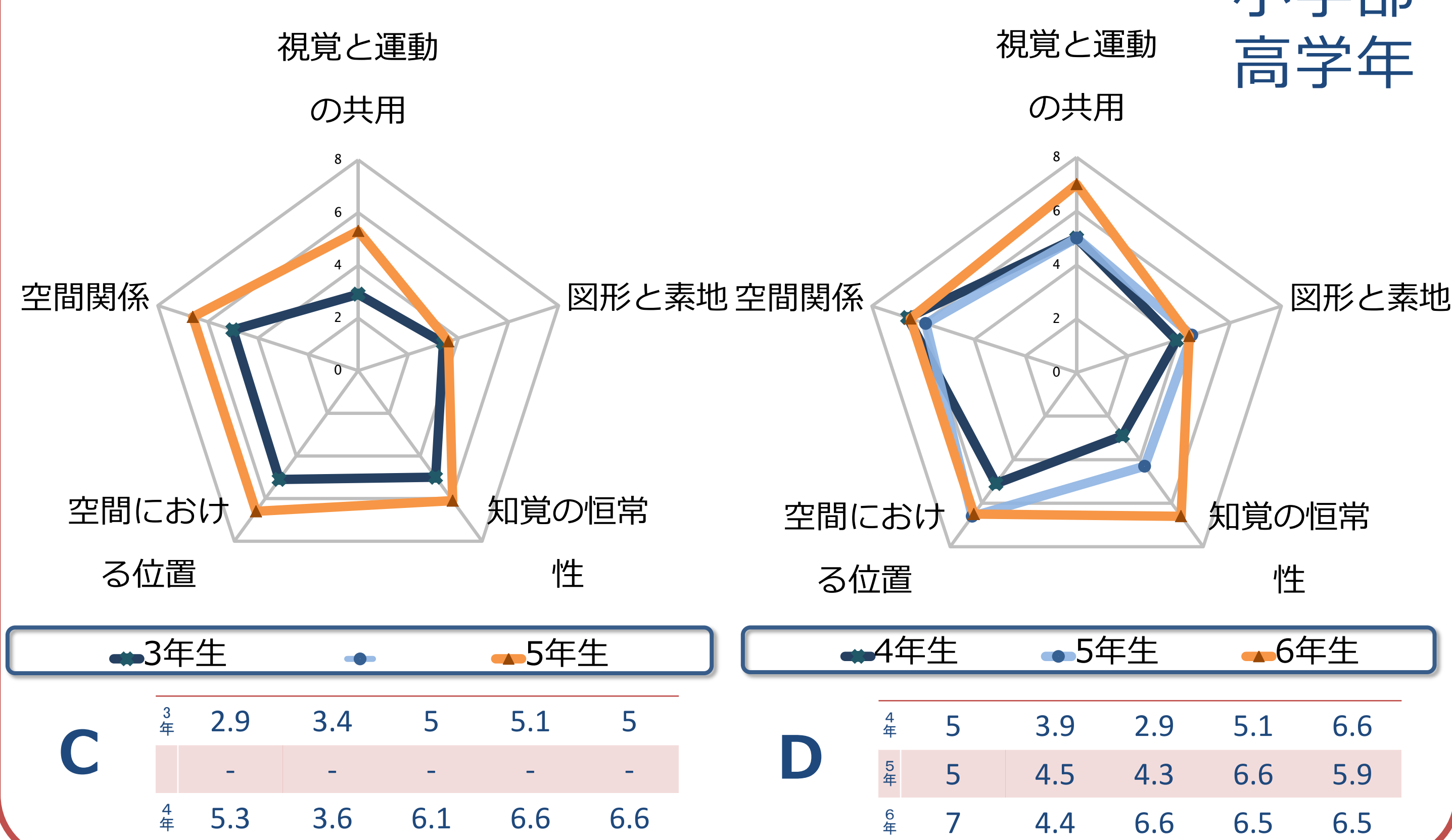
1. フロスティック視知覚能力促進法を参考にした指導
2. 型はめ、縁取りなど触知覚と言語を使った弁別学習指導
3. ジオボード、図形や色塗りなど、全体構成と部分の指導
4. パズルやブロック等の空間関係、空間位置の学習指導
5. ゲーム等による視覚と運動の供応を目的とした指導

結果

小学部低学年



小学部高学年



考察

- 自立活動の時間における視覚認知機能の指導は、小学部低学年、小学部高学年ともに一定の効果が見られた。
- 小学部低学年に比べ小学部高学年の方が評価点の向上がより見られたことから、小学部高学年の指導が有効だと考えられた。
- 今までの研究と異なり長期間のDTVPの経年検査では、下位検査項目の図形と素地での評価点があまり向上しなかった。
- 視覚認知機能の困難に対する学習面の手だては、図形の素地の項目である注視を考慮して行うことが必要であると考えられた。

まとめ

痙直型脳性まひの視覚認知機能の困難は、学習面に影響を及ぼすといわれる。しかし、この視覚認知機能の困難に対する手だては、長期間の経年変化を検討する必要があった。そこで、DTVPによる3年間の経年変化を分析した結果、図形と素地の下位項目に難しさがあることがわかった。このことから、視覚認知機能の困難に対する学習面の手だては、図形の素地である注視を考えていく必要性があった。

